Title	巻頭言　もとへ戻りそこに留まれるか？
Author(s)	阿久戸，光晴
Citation	聖学院大学総合研究所紀要, No.36, 2006.12：3-5
URL	http://serve.seigakuin-univ.ac.jp/reps/modules/xoonips/detail.php?item_id=4035
Rights	

聖学院学術情報発信システム ： SERVE

SEigakuin Repository and academic archiVE

巻頭言　もとへ戻りそこに留まれるか？

聖学院大学総合研究所副所長
聖学院大学学長　阿久戸光晴

芥川龍之介に『トロッコ』という短編がある。一人の少年が車夫にいざなわれてトロッコを後ろから押していく。日が陰り少年の心には次第に暗い予感が沸き始めるが、車夫を乗せて押し続ける。すっかり暮れた頃、車夫は少年に「もう帰っていい」と言う。そう言われてもここはすでに家から遠く離れた山奥である。少年は涙もぬぐわず線路を逆に一目散に走り、真夜中に家にたどり着き両親の懐で泣き伏す。現在この主人公は東京で働いているが、今も夕暮れになるとこのエピソードを思い出すとして終わる。この小編は鋭く暗示的な内容を含んでいる。特に三点を指摘したい。

第一にこの物語は、この世にトロッコの車夫のような少年をいざない利用し、帰ることが困難な所へ連れて行く恐ろしい力がこの世に存在することを伝えていることである。それは人間の根源的不安の原体験であろう。しかしそれは単に鋭敏な文学者の感受性がとらえる何かを超えて、存在する強力な世界的潮流が表現されているのであろう。確かにこの作品が発表された大正一一年（一九二二年）、日本は中国やロシアとの戦争に勝ち、国家意識は高揚していたが、社会変動は激しく、このトロッコ

少年が育った地方にも近代化の波が押し寄せていたことが分かる。正にトロッコの敷設という近代化が押し寄せていることが、この物語のきっかけになっている。江戸時代の封建体制が古き良き時代であり、トロッコ少年には懐かしいふるさとであったとすれば、アメリカのペリー提督による黒船の到来によって日本は激しい世界的渦に巻き込まれた不安が語られている。

第二に、怖いところまで来てしまった所から、少年は一目散にふるさとへ駆け戻るのであるが、「もとの所へ戻る」ということがもう一つのテーマである。この意識は今も日本人の深層意識の中にある。帰巣本能、伝統回帰の動きは、日本国家全体が「トロッコ不安」というべき事態に陥るときには、必ず現れる傾向であろう。現在わが国において、新しい政権が困難な船出をしようとしている。しかしこの政権の特徴は、幾人かの新大臣の発言を聞く限り、「もとの美しい日本へ戻る」ことがキーワードのようである。教育・宗教の分野に限定しても、首相自身の憲法改正と教育基本法の抜本的改訂への全力投入発言、靖国神社参拝尊重発言（外交的には明確にしていないが）、また三世代家族の同居を家庭の理想とする発言、また文科相による「恥の文化」重視発言や小学校段階での英語教育の否定的見解（この点は関係学会でも賛否両論あるが）、さらに法相による「個人優先の風潮是正」発言等々である。

ところであの小説の結末で、トロッコ少年は懐かしいふるさとへ無事戻ったが、その後妻子とともに東京へ出て出版社に勤め校正の仕事をしていることになっている。従って第三の点は、暗示的なことながら、結局この少年もふるさとには留まらなかった（否、留まれなかった）という点である。東京とは、もろもろの世界情勢やグローバリゼーションの潮流の影響をもろに受ける象徴的場である。

大木英夫本研究所長は、民主化・工業化・都市化・情報化という四要素を持つ社会変動の歴史的不

可避性を指摘している。この社会変動にはさまざまの諸力が同居している。この社会変動に便乗して、人間疎外を撒き散らす諸力も存在すれば、この社会変動を深層において動かし、人間の権利と福祉社会という新しい秩序づくりへの産みの苦しみを担う形成力も存在する。トロッコ少年の課題は、車夫の引力に引きずられない批判力を持つ価値判断基準と、生き抜かねばならない都会という新しいグローバル社会において新しい社会の担い手となるエートスとを、身につけることであろう。それは「美しい日本へ戻っていく精神」でなく、「美しいグローバル社会を日本において形成していく精神」を身につけ、不可避な歴史的方向へ進んでいくことである。この課題に応えない限り、日本はかつてのように国際社会の中でますます地盤沈下していく恐れがある。日本の国際連合常任理事国入りが支持を集めず、韓国の外交通商相が圧倒的歓迎の中で次期国連事務総長に内定した昨今の事態は、まさに予兆である。為政者の歴史観の謙虚な再検討を期待したい。なぜならば、ここ数年の日本国家、日本社会の舵取りを誤れば、これからのわが国の歴史展開にとって取り返しのつかない事態を招きかねないからである。

海図と羅針盤がなければ、航海は不安でありもとの港へ戻る方が安心である。しかしそのような甘えが許されない現実ならば、航海中であっても船長と航海士はしっかりした海図と羅針盤を手に入れ、確認し学ぶ必要がある。当研究所は、日本のこれからの海図と羅針盤を歴史大・世界大の視野によりあらゆる角度から本格的に追究し組み立て、少しでも社会および国家に提言して行く所存である。